

平成19年度津山工業高等専門学校有識者懇話会記録

1 日 時 平成20年3月5日(水)10時~12時30分

2 場 所 津山工業高等専門学校会議室

3 出席者

外部委員

岡山大学理事(副学長)	稲 葉 英 男
津山商工会議所会頭	浮 田 佐 平
美作地区中学校長会会長	禿 智 久
津山市長	桑 山 博 之
津山高専同窓会会長	末 澤 俊 一
岡山県美作県民局長	杉 山 誠 一
津山圏域工業会会長	豆 原 直 行(都合により御欠席)
美作大学長	目 瀬 守 男

学校関係者

校長	阿 部 武 治
教務主事(副校長)	岡 田 正
学生主事(校長補佐)	田 淵 俊 彦
寮務主事(校長補佐)	田 邊 茂
専攻科長(校長補佐)	下 西 二 郎
産学連携推進委員会委員長 (地域共同テクノセンター長)	福 田 昌 准
学術情報委員会委員長 (総合情報センター長)	最 上 勲
機械工学科主任	吉 富 秀 樹
電気電子工学科主任	伊 藤 國 雄
電子制御工学科主任	里 吉 昭 宣
情報工学科主任	大 平 栄 二
一般科目(文科系)主任	杉 山 明
一般科目(理科系)主任	三 浦 和 久
将来構想委員会委員長	小 西 大 二 郎
外部評価点検委員会副委員長	藪 木 登
事務部長	仁 科 幸 雄
総務課長	沖 淳 一
学生課長	此 枝 昇
地域連携・広報室長	井 上 哲 夫
総務課課長補佐	大 倉 壽 夫
総務課総務係長	山 本 純 生
総務課総務係員	山 本 裕 美 子

4 議事等

- 一 開会
- 二 校長挨拶
- 三 有識者懇話会委員及び津山高専出席者の紹介
- 四 日程説明
- 五 座長選出
- 六 津山工業高等専門学校の現状説明
 - 国立高等専門学校の再編整備について（事務部長）
 - 大学評価・学位授与機構による認証評価について（外部評価点検委員会委員長）
 - 受験志願者の動向と学科改革について（校長）
- 七 質疑応答・意見交換
- 八 有識者懇話会委員による評価
- 九 座長挨拶
- 十 校長挨拶
- 十一 閉会

5 質疑応答・意見交換等

（1）大学評価・学位授与機構による認証評価訪問調査について

Q 認証評価訪問調査の結果「改善を要する点」として指摘された事項2点について、指摘の内容や学校としての対応を説明願いたい。

A 1 学校の理念・教育目標を周知するため、学生・教職員に「技術者教育プログラムの学習・教育目標」カードを配布している。更に、学生に対しては学校の理念・教育目標を各教室に掲示しているほか、教務委員会を通じ、諸々の機会において周知を図るよう努めている。また教職員に対しては、運営会議を通じて周知する等の方法を、外部評価点検委員会が現在検討しているところである。

以上のように、周知については種々の試みを行っているが、今回の指摘は、どの程度周知がなされているかを把握する努力が不足しているというもので、どのような手段で把握すればよいか等難しい問題であるが、学校として取り組まなければならない。

A 2 認証評価の実施時点では完成していなかったため配布資料には書かれていないが、本科生の場合も専攻科生同様、学習等目標記録簿に記録させており、学習の到達度を学生自身が評価するシステムは確立されている。ただ、その結果を学校としてどのように評価しているか、あるいはその結果を学校教育にどうフィードバックするかという点が不十分であったことが、今回「改善を要する点」として指摘されたものであり、今後の検討課題と考えている。

（2）高専改革と地域連携について

Q 1 我々が最も心配しているのは、行政改革推進本部の掲げる「独立行政法人整理合理化計画」など国策による高専の統廃合であり、現在のところ津山高専は統廃合の対象校となっていないが、油断はできない。工業以外の分野へ展開を図る（学

校の規模を拡大する)など、統廃合の対象とならないように防衛策を考えて欲しい。また、学科改革に関しては、過去の改組で金属工学科が廃止されたのは残念であり、環境・エネルギーも重要な分野とは思いますが、金属工学の分野をコース制等で採り入れていただくことを要望したい。また、津山高専技術交流プラザとの技術交流、産学官連携のさらなる活性化を望みたい。

A 1 本校では、以前に金属工学科を廃止し、情報工学科を設置するというかなり大胆な変革を行ったが、金属・ステンレス等の分野は、現在でも機械工学科の教員が対応しており、また、技術交流という点に関しても、機械工学科が中心となって努力している。

A 2 本校としても「地域に根ざした高専」、「地域に繋がる教育・研究」という共通認識は持っており、高専プラザを通じて地域企業とも公開講座、専門セミナー、インターンシップなどの様々な取り組みを積極的に実施するよう努めている。個人的な見解になるが、まず教育・研究、地域連携はその次の3番目の位置付けというのが教員の一般的な意識であり、教員の意識を地域連携にまで向けさせることはかなり難しいというのが実際のところである。しかし、津山市及び津山圏域があつての津山高専であり、今後もその方向で努力していきたいと考えている。

Q 2 大学発のベンチャー企業が着実に増加しているにもかかわらず、津山発、高専発のものがほとんどないのは寂しい。

A 1 ベンチャーという訳ではないが、今年度岡山TLOに加盟し、TLOを通じて本校教員の発明が初めて技術移転された。

A 2 学生が卒業後すぐ起業するというのはなかなか難しい面があるが、一つの例として本校卒業生が10年程度前に大手電器メーカーから独立してロボットの設計会社を立ち上げたものなどは、ベンチャーと言える。

Q 3 学科改革について、どれくらいの時期を見越して検討しているか、また、学科改組の手続きにはどの程度の期間を要するか。

A 社会情勢や高専の再編・統合などの動向、そして志願者倍率の状況などに対応する必要があることから具体的に何年先とは明言しにくい面があるが検討は続けている。また学科改組の手続きに要する期間については、6月頃までに申請し、翌年度からの改組を目指すこととなるものと考えられ、目標年度の1~2年前から手続きを始める必要がある。

Q 4 伝統的に津山高専には行政機関とも良好な関係を続けていただいていることを感謝したい。「つやま新産業開発推進機構」などで産官学民連携というときにも美作大学、津山高専と必ず名前が挙がってくる。美作大学、津山高専、津山市の3者で、このたび包括的連携協定を締結することとなっており、3者のいずれにとっても連携協定による効果が期待されることである。津山高専は地域にとって欠くべからざる財産であり、できることは何でもさせていただきつもりである。

また、日本が社会全体として人口減少に向かうことは厳然たる事実としてあり、

その中での志願者確保，ひいては高専の存続ということを考えて大変に難しい部分があるが，よろしく御検討願いたい。

- A 包括的連携協定の協議については，美作大学の先生方，あるいは津山市の方々と膝を交えて話すような機会は，これまでであれば限定された機会しかなかったが，連携協定によりそれぞれの組織が要望を出し合って互いにメリットのある事業を検討・実施できるようになったことは，非常に有意義なことだと実感している。

(3) 外部資金の獲得について

Q 1 岡山県の場合も，平成19年4月に県立大学を独法化しました。国立高専でも年1%ずつ交付金が削減されるという話だったのでしょうか。資料(学校要覧)によりますと，現在，運営費交付金が10億程度ということですね。また先程，運営費交付金削減への対策として教員の削減などという話もありました。そういった状況の中で，特に外部資金の獲得ということについてお伺いしたいのですが，平成18年度と比べて平成19年度は金額が増えているのでしょうか。

Q 2 外部資金は増やさなければいけませんね。マサチューセッツ工科大学などはすごい数字で，確か研究開発費の52%を外部から獲得していたように思います。

A 寄附金の受入れに関しましては，受入れ件数19件，金額約1千3百万円余となっており，金額的には18年度より増えております。次に，共同研究につきましては7件，約4百万円余で増額，受託研究は4件で約700万円弱となっており，これについては減少した結果となっております。また，科学研究費補助金の19年度採択件数は継続分を含めて5件，採択金額は合計約5百万円余で，平成18年度は3件で，外部資金は全体的には増額傾向にあると言えます。外部資金については今後の学校運営に欠かせない資源でありますので，引き続き積極的に受入れを図っていきたいと考えております。

(4) 入学志願者の確保について

Q 1 平成20年の志願者倍率はこれまでと少し違い各学科の数字が平均化しているように感じますが，これには何か要因があるのですか。

A 1 これは第1志望だけの数字です。本校では第2志望，第3志望まで認めておりますので，他学科に属することになった学生もいます。

A 2 今年の戦略として，まず第1段階はオープンキャンパスへの参加者募集や広報用のパンフレットの大量作成・配布などPRに力を入れたことが奏功して志願者倍率が少し上向いたものと思われま。それから次の段階として，学科を選択していただく際に，本校の4学科はいずれも工業系で分野が近接しており，どの学科を選んでも授業の7割程度は内容的に大きな違いがなく，卒業後の進路の面でも学科による有利・不利はないことを説明した上で，第2志望・第3志望に「全(どの学科でも良い)」という選択肢を設けたことが，そういう結果に多少繋がったと考えています。

Q 2 例えば、家庭への広報活動などもされているのでしょうか。

A 家庭への広報、中学生と直接的に触れ合う機会ということでは出前講座、学校説明会を、ローカルであっても高専を認知していただけているところとタイアップして開催してPR活動を行いました。やはり大きいのはオープンキャンパスで、このときに保護者の方々も来られているので、オープンキャンパスで本校の学生の姿を見ていただくのが最も効果的だと感じました。

Q 3 近年非常に努力されていることは良く分かりますが、私立の場合はもっとすごいですから。もう全然違いますので。県南のある学校のオープンスクールに1人が参加したところ、後でその子が受験するかどうかわざわざ聞きに来られます。何が何でもとると言うか、県南の学校ですから県北を狙う必要はないんですけど、そこまでしますからね。お願いしたいのは特に県南、県北では津山高専はよく知られていますから、是非とも県南の各地で教員を対象にした学校説明会、進学説明会を開催していただきたいと思います。

もう一つ、高専を出たら「準学士」だということ。ここに、特に県南ではこだわりがある訳です。どうしても大学、すなわち「学士」にしたいということがあります。意欲さえあれば、高専からでも進学之路が用意されているということをもっとアピールするべきです。県外の大学であれば、大学へ4年間行かせるよりも高専から大学3年次への編入学の方が、外へ出る期間が2年ですむので経済的であるとか、そういった良い面を知ってもらうよう努めていただきたい。

A その点は本校の方でも重々理解しておりますところで、今年度も色々な機会をとらえて県南に出向き、先生方への説明をいたしました。津山高専をご存じない方がまだ相当いらっしゃるということは、アプローチ次第で新たな志願者を掘り起こせる余地が残っているということだと思われれます。

(5) 御提案

先日こちらに伺ったときに、この冊子(『われら高専パワー全開』)をいただきました。この本は高専機構が編集、発行したものらしいのですが、各高専の卒業生が2名ずつ掲載されています。これと同じような冊子を、津山高専でも作成されてはいかがでしょうか。津山高専の卒業生も様々な分野で活躍しておりますし、これを津山高専が発行すれば、相当にPR効果があるのではないのでしょうか。